

慶長  
業末

新刀辨疑

一

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



LAM  
7

不許翻刻

慶長以來

新刀辨疑

藤原魚妙藏版

新刀辨疑序



新刀者何。別古刀也。辨疑者何。為世  
辨似而非者也。何謂古刀。十握族雲  
尚矣。自昔天治氏奉

制。為族雲造副也。子孫十數世。守業  
不墜。京関備前諸州刀匠。嗣出。至元天

年。間。殆。二。子。有。餘。載。數。百。子。之。是。為。古  
刀。慶。元。撥。亂。而。來。四。海。無。事。建。國  
三。百。無。國。不。有。良。匠。而。數。十。百。之。是  
為。新。刀。何。謂。似。而。非。者。母。貝。草。已。歸。戢  
囊。刀。劔。之。為。漸。走。浮。華。龜。文。漫。理。  
以。眩。衆。目。者。注。之。而。然。女。姦。商。乘。之。競。為

奇。貨。所。倩。校。焉。之。匠。唯。贗。是。力。欲。希  
翼。鳳。鸞。愈。務。愈。遠。是。謂。似。而。非。者。  
滕。九。年。氏。惡。彼。姦。黠。謬。世。誣。衆。又。傷  
韜。幹。家。認。沽。為。良。所。騙。不。警。於。是。也。  
明。真。贗。之。疑。具。眼。而。后。可。辨。焉。并。為。良  
工。雪。其。寃。云。夫。良。工。之。治。樸。也。百。鍊。為。鑄。

新刊雜錄  
卷之二  
淳祐清泉。拭諸志土。苦心而后成。得於  
手。應於心。有不啻扁之於輪者。而存其  
如與天成。其象與神化。非復厲之所  
能為也。滕君益有見於斯。潛心多  
年。於鍛與磨之技。而親為之。能窮  
其所。嗚乎。勉矣。而后真之。与厲一見則

知焉。如歆之於馬也。其班七等。隨能品  
第。雖錯諸觀。美與舉。法斷割乎。大冶  
之造。未嘗不文理精妙。星動龍飛。如沸  
如出也。大非蹈齧。剝而獨而成者。以君少  
曰。妙處每在如沸如出之間。徒論刀笠。歎  
識抑末也。所謂具眼而后定之者。其則益

不遠焉。庶於玄黃。精於神駿。君之  
於刀六云。余已序此編。及其重刻。更序  
為贈。

安永八年歲在己亥夏六月念八日

四明井仲龍撰



東江源 辨書



新刊神皇正統記序

予以素々高の鴻緒を承るに茲 邦ハ金皇  
業方下り神皇正統記を以て 源冊乃三ノ天の  
浮橋乃之に立一ノ神皇正統記を以て 源冊  
越抄了終以予の滴り凝り望むる島を以て  
里海くを生まるる神皇正統記の天ハ海の國と奉 大方  
貴言無 御子千三能國を彌けあふ其古十握  
ハ握乃神皇正統記 素皇正統記ハ候乃大坂を  
討之由に其尾又當り神皇正統記ハ一ノ神皇正統記ハ尾の中

あまのついでに天照大神を以て神代天皇と云ふ。天照  
大神は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。天孫  
降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。

天照大神は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。  
天孫降臨の御孫は天孫降臨の御孫に是を天乃皇孫と云ふ。



辨せ給れ又治平自心造りて以て其の相ある  
 予説を待たざるもつらや五段入道西宗無徳國  
 在體歴し金蓮乃家系或は持方越考記一守  
 廻明記と題せるもの者西宗たの良良宗九百三言  
 秋廣高徳某守都某之河入道也徳へ来りて此  
 八道ハ赤山教の比乃人ヤ價時とあるものなり  
 持方の子始れりといふ事ハ沙之好善志ハかの  
 傳を受くつら由本河原の先祖無徳和乃始と  
 初を廢るるを業とすも由本河原源佛といふ事

何れに思ふ高相の精しき事廣りしとある  
 是の代の孫清位祖業を無造りて是ハ本光  
 とす方の子光の字哉用ゆるに奉りて此は  
 世の初の持方也乃其跡を定むるを後とす世  
 目利のちと題せるものなり相行り多しと云ふ  
 志又云ふなり一江府神田持久といふの書長  
 お及の物を持方と稱し持方銀書と著し難波  
 乃數葉を度集を求て是より子近代の治王也  
 死すりとの者なりを知らず其より由集乃功也

予此年より高相を更りし遊ひを本を及  
 以て末を弄好を教ふ美志を有する人新刀  
 辨劣或は執を端すれは是は彼より優劣  
 人れは是より劣ありは是より優ありは  
 乙然りし七世は成河の白子に此を實り  
 人乃迷ひを釋り是れは空むありし君人や  
 是れは公もよと勤む事再び之を以て然り  
 高子乃空の枝折深きことこの梅子宗  
 子宗は幸ありんと空の娘りも越梓り

懐くありし越世へ新刀能輪と号あり  
 其の年つと志の或問ありおとせり解き  
 在りしゆる宗人むや美此及同じ好む交  
 有りしゆるの及ははれを補ひ是は予の宗り  
 志は又刀匠能才ありは是れは予の宗り

徳田三良大夫

高子宗の亥秋 宗系魚好



友人 我の書を重抄寫せ

西

凡例

一 勝久が新刀銘盡及び大板の後集出てより今世に於て亦  
 上工數家者、と評する所、故に堀川國廣、大板生及助廣、江戸所  
 出、其書の刀匠、ハ實物以て人を惑す多し、故に今世に於て  
 出、すといつ、凡、眞偽を辨ずる、ハ、世に於て、賞、受、の、刀、匠、其  
 國、の、序、の、心、を、以、て、正、し、其、物、を、數、毎、圖、して、辨、其、解、の、つ、め、を  
 爲、尋、常、の、刀、匠、ハ、惟、獨、考、辨、鑑、定、す、る、の、み、敢、て、中、心、を、出、す、が、又  
 何、圖、す、る、も、早、抄、て、圖、す、る、所、抄、寫、の、乃、も、之、を、石、彫、刻、の、様、も、又、多  
 かる、を、見、し、見、る、人、を、誤、解、せ

一 萬集の國の志を以て鍛治又ハ漏れる刀匠或ハ其以後の治工等  
 多し、今、亦、又、及、不、心、の、考、之、を、載、す、る、に、  
 一角野書見正久と云者の一書、其、上、應、永、の、故、を、温、紙、下、享、保、十



新刀辨疑卷之一  
新刀辨疑卷之一  
新刀辨疑卷之一

卷五 中心軌範

畿内

東海道

卷六 中心軌範

東山道  
山陰道  
西海道

北陸道  
南海道  
國不知

卷七 附録

角野壽見一書

以上

新刀辨疑卷之一

或問

或問神田勝久享保の末新刀銘書其巻を著し相續て難波の後集出  
しよる凡慶長の以より享保迄は國鍛冶の勝劣ハ無知す一し然れ  
ども中心の形と所作との可否を論ずる所至らざるの故上下の品  
別分ると云物為此書も似令下作も世小賞契亦記鍛冶ありた  
悉く中心の抽形出すべきありあらん欲

卷云先板後集に心と申ひ下作も諸人賞契たりの如も銘中心  
心の及ふかけ眼の見るた多ハ著しやりと元ゆきと其切を速うに  
せんともよくや写し誤れる所の多し故今世人の賞契あるを以て  
修物と作り世を迷すこと多き所憂て正しく起を数示出す考也併  
筆力の及ぶざる所或無彫刻の誤り有べし真偽一変ハ切者不何す

居し何れの書も出さ書よ〜と眼力ハ別々以心傳心の〜と云ふこと

或問世々劔相ハ目利といふの意ハ大小異ありと云ふ然るを今  
劔相目利ハ不同と云ふ

答云劔相ハ猶目利の如し其ハ又の徳と尋も也世ハハ劔の  
長短ハ又の吉凶示し或ハ又の操標を以吉凶と示し或ハ逆置  
乱ハ悪しのたま又ハ〜と劔本の又端で細く又帽子美〜と端で  
あどやうなる〜の吉劔とす或ハ一通やうちえて又の成不來  
も疵の者受も拍〜と福祿壽夭病難苦を〜と云ふ言を巧  
吉凶善惡と云ふ〜と人々異也筒標の華小利と貪や人心迷すの  
甚〜とあり心あり〜人齒又惡〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも  
其位卑〜と云ふも我も吉劔上作と空定の所を撥ひ求て重寶とす

と世の通義也予がハ劔相ハ劔徳の奥秘ヲ知る能くもあ  
る〜と云ふも大意の所ハ金氣の射令〜と云ふも鉄の乾潤を知  
試ハ俟ず〜と物ゆく切る〜と云ふも又目利と唱る中〜と云ふも古物ハ  
を專とするの〜と云ふも金氣の剛柔を考〜と云ふも只工匠の名のみ古今  
又傳る所を專ら論ずる也亦〜と云ふも是〜と云ふも〜と云ふも物ゆく切  
源の満仲吉劔を求給〜と云ふも心ハ用ひ〜と云ふも試ら〜と云ふも物ゆく切  
の〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも劔ハ〜と云ふも重宝也戲の器にあら〜と云ふも  
所〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも  
人ハ頼〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも  
也〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも  
より數百采〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも  
相〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも

一と云ざるるの由也故云相と目利とハ異名同意と知るを以しと  
 或曰勝文新刀ハ心切用ゆるる也其著す所の書ハ繁慶虎徹堀  
 川の國廣把前ひげんの忠吉たけよし九字くじ若字わかしの包保ふくぼ昔の數筆すうひつを上作うしやうとす大坂の  
 後集こうしゅうハ津田助廣すけひろ新刀の冠かむかとせり包以薩州さつしゅうの正清安代せいせいあんたいを最上  
 ありといふ人も又多し其攻うごを大坂の正宗せいしゅうと云人もあり然るを今  
 助廣すけひろ第一だいいちとして真改まかいハ平次へいじとして國廣くにひろ以下以下又平次へいじハ出せし  
 ハ大坂の後集こうしゅうといふ所近き也

答云勝文の新刃銘盡ハ海内うみうちを求めて能集よくと云と云べし後集ハ其  
 不ふ又悉しつして廣ひろくぬ所ところ有ありぬし其兩部りょうぶの切切きりぎりあり考かんがへ且かつ金氣  
 の金かね備ひり地織ぢぢの蹄かひ能よくく鋭えいいさましく白しろひ至いたる白しろくいなも  
 物もの深ふかくして刃やいばと地織ぢぢの整ととのへ聲こゑハ虹にじの蔚うするが如ごとく爽さわくして麗うるはし  
 切きりを上うへ作つくと定さだめたり國廣くにひろ忠吉たけよし席せき徹てつ繁慶はんけい昔むかし作つくるも死しざる上うへ作

たりといふとも津田助廣希首けうの上手うでずにして猶なほ平へい中ちゆう又勝かたたると云  
 つづし

或曰井上和泉守國貞くにさだ老後らうごの作つくを忠改ちゆうかいと号なづけ然しかるに國貞くにさだ價あひ言ことわら  
 ぬ極ごくふ心得こころえ真改まかいハ別わかけ又價あひ貴たかし助廣すけひろも後のちハ近ちか衛流ゑりゅうの銘めいなるを重おも  
 寶たからとす同一どういつ人の造つくる事こと知し銘めいの前後ぜんごハ拘かまると不ふ審しん老後らうごハ其その功こう  
 も至いたるる日ひやぬ素もと

答云井上和泉守と銘するも助廣の楷書かいしよの銘めい共ともふ壮年さうねんの作つく故ゆ地織ぢぢ  
 の鍛かた締ぢと老後らうごの作つくすをハ勝かたれたる方かた也唯ただ其その道具どうぐ又またよりて甲かぶつ乙おつハ  
 論ろんずべし壯年さうねん老後らうごハ後のちての勝かた劣せうハ皆みなしと知るしるを以もつて其その何なにの作つく  
 日ひても見み不ふ准じゆんすべし

或問新刀銘物と見ざる勝かたと上手うでずと出でせるにふのふのと宜よろし  
 奴やつ者もの大鉢たいはちの作つくと出でしるも又また平へい中ちゆうと申まをしるも勝かたて出で來きの純物じゆんぶつ

多しは度次第を定むといふも是又其益未だのまにあは諸人の迷ひも未だ起り

答曰此論高しといふし只先板西部の力が仮積年考す所の多きを以て仮極すのみ上作と極す中のみ取用するは禮の物も有し下作の中よりも好みの小撈るを起物も出づし未だから偽の二つ二つを取らば七つ二つの多きを以て位を極す也

又同井上忠政は大坂より宗より相物正宗ふ比したるはお似る不者も只大坂の其所の上工ゆへ尔云也

答云真改が能なるや其鑑の見事あると云ふ入道正宗の後一人ある者能ふ尔いふあるを

又曰然ハ正宗より似する忠政を第一とす能なるあるに却て助慶の次は並たるハいけん

答云鑑ハ次より自ひハ劔の魂也亦自ひハ先小して鑑を以て為也其目利者流ハ鑑の善惡を以て作の高下を定め正宗ハ古今鑑の名人地鉄の辨又事に自ひも至て深く實事名を起上工也亦名人を考すか又栗田吉光國吉善佐高の友成長光以下の鑑治の趣を悉くせず摩ハ鑑之鐵の火は燒きて沸ゆる漆の心也自ひハ火火又及の過なくして鐵の精細を備りしをすを顯する金氣の本然を望みのみふして劔の魂也亦自ひハ鑑す至大事ある亦わたり凡物刀の鑑治數百家有といふも助慶う如く鑑の善より福すく又の上鑑しく自ひ深く深や加又白く小鑑はも自ひを拘いりるも物深く地鐵剛くは柔かすく火加減を極すの所得たる名人ハ有るうす鑑亦此道をよも自ひ深きハ物よく切る多し亦大和吉道河内守國助等名堂の一族佐高の類也亦

自ひふ起物無物切去するハ皆てなる也其流ニ自ひハ車ノ五輪  
の如くして全使せり以上作とせし銳自ひ共ニ鐵の魂なる也  
火過れば鉄の多く出づ地鐵又の上せし乾き出る也名人の業と  
する所ハ自ひ日て流を包むを最とす自ひ流く流多きハ裸鉄と  
婦也鉄自ひせし揚ふとつととも生出來弱く夜沈むるハ是又忌  
嫌ふ也唯浮きく強壯と善とす也物流見事あるハ粟田口相州の  
直三人郷義弘中古關和ある善定生及善是也國廣明壽忠吉警  
慶善の鋭ハ光薄くして少しうも又助慶席徹助直善の鋭ハさのこ  
光りハ覺れども自ひ流起ぬ又善あり正法安代以下薩阿物の流ハ  
光有とつと力為し又其田の鋭ハ甚荒くして其位卑し物自ひは  
も色ハ赤第一浮り又白く物流くして流又ニ地鐵夾よりて  
又方ハ虹の如くむらなく顯るるを善とす江戸法城寺の一類又上

上総女兼重大和吉安定安備岩城の國席善の自ひハ深しとつと  
色重く卑し又點々と集まる所ある自ひハ松以卑起物也

或問地肌ハ擲て世の當美する亦也物多ふは好むをうと云ハ  
いけん

答云根元の鐵ハ孔多し船治の家流およりて板目板目と品異  
とつととも鐵を數篇船るハ本地鐵如く其又し飽せて造んが

為也數百葉の度自然に船目顯るる針物なれども是等ハ同く  
ハ地鐵の透るやなく堅ハ羽二重の如くはあまはけを始す其  
物と造るや立るハ船治の心も好む人の心も善くすと云座起也其  
鐵の流有るも亦より好むとつとて造るは又亦先と取立  
りのハ松更宜うぬる也

或問此其ある者書と著して中ハ新刀銘書集焼土し物といふ

夫と有是を炮物といふ一度焼するは火氣を燒盡すをいふ也多  
 少異なる物也用ゆべくば是者は一偏の偏也其雜治の心は應ぜ  
 ざる出来ハ何篇も燒直す事也然れハ程強まるも火炎不達之  
 ハ切先の又上り又為刃の背くを好むと云は上手の能なる  
 を上手の燒盡す、と為何れ度燒直すも道具の為不思きし電  
 能出来た系ハ上作もあるもの也乃其の害ふあざる考へてし  
 又燒盡しおぼすざる道具も刃の中ハ弱氣あるハ切先は弱氣出  
 する物ハ同燒をく用控すと云りは言ぬ何

答云是火又初心の迷ひ取らば、と也精々に能ひ強て又を燒す  
 ます、聊ハ火氣の過不及も刃味差別いらく、上手鐵ハ火日そ  
 燒度、とに弱るりのあまざるも鈍す、おが火退地居る鐵蹄を  
 て元ハ疾る心也燒盡の時火火して燒のみす、強く鈍す、打る

ハあざる物ゆ、火氣の鐵如、澄りたる、匠、是火退く、故鐵の魂  
 火氣に奪り、汁めて更、強くなる、故、理、古人も又、燒直ハ  
 馬、ハ、傳、ハ、中、者、の、説、取、ハ、是、も、と、也、去、あ、り、純、道、具、を、燒  
 盡、した、らん、ハ、一、向、の、好、打、世、不、い、生、く、物、を、為、務、中、ぬ、を、上、作  
 にも、なる、とい、ハ、大、又、矢、を、起、る、也、燒、盡、物、ハ、射、ハ、乾、有、て、銳、力  
 なく、中心、も、乾、あり、て、察、し、易、也、もの、也

或、同、雜、治、の、後、又、元、祿、の、比、以、來、ハ、諸、國、の、鐵、山、を、出、す、鉄、性、を、追  
 て、宜、く、ば、夫、故、む、り、の、如、く、ハ、出、來、く、や、と、云、至、此、後、い、ん  
 答、云、鐵、の、出、來、ハ、先、名、州、出、羽、播、磨、出、粟、及、び、千、草、牧、ハ、南、蠻、鐵、を、和  
 蘭、人、の、齋、渡、る、本、の、系、形、瓢、草、形、の、鐵、を、以、て、造、り、又、ハ、御、鉄、を、造  
 る、知、ず、す、何、れ、昔、ハ、劣、ま、る、也、吾、侪、ハ、是、雜、治、の、務、劣、ふ、り、て、鉄、の  
 善、惡、を、為、す、と、云、る、一、し、り、時、薩、州、又、正、良、安、在、安、明、元、平、清、方、若、が、作

を以て見るに粗中亦を得ずりともいふし予を以て鐵性を考るに  
 子字穴粟出羽の鉄を擗て火加減小心を以て相繼も治治の力と為  
 者を得ぬ火の度如程よくせむふご上作の出来ざる事々者如火  
 氣を回さば一之鉄の細美又疎るべし能考一知を治治のたると  
 するまき也良鉄といつても火の過る時ハ弱り出ると乾りのおはる  
 治として勵ますんむ者なかりは是鍛冶お在て鐵少のすさ知し  
 △或は傍久ハ疵の見難素一く出せを夫より前ハ疵ある道具ハ忌む  
 疵起るとし近比おとすハ少の疵も多起るに昔おぬハ如何  
 △若日叙ハ疵の勢を思ふ其勞實お多あるあらず又切敷張又意以  
 下おて切先の内横お疎ある疵者小き連も極子によきて許し  
 縁又切敷た字とも押て消金疵疵ハ許し用ゆつ起る也残りたり  
 弱りお成ざるおむ亦用ゆる起る也丁少カも疵おきハ稀也此や

長叙也鐵の堅固は續ておざる道具ハ起るゆるすべし小疵の  
 以味お重ハ叙の手要たる所を能く治護者おたると也  
 △或は油の敷又摺て九疵ハ強く戦お時お易し故に鐵鐵端の方  
 鐵をおくおざる為り又貴金を加へ造るも有はるぬふ  
 △若云九疵ハ上作の疵おして尋常のおあるべし又水田の折ると云  
 も偏論也地鉄五疵おくして強起叙の折る事何すおざる為らつ  
 く古鐵おかると更におおたる也平地の中起るても鐵の弱お  
 ハ折る事おし荒鉄一面お焼た字ハ用控者起也物黄金を加  
 必細考ると地鐵を造るおせん為らざるし前もいふ如く古作の  
 自然お出する肌さくせよハ志うす好む能物造るの上者重を加  
 造るの意味拙との甚しおあるは也右傳お楚王鄭公は金を加  
 置中お悔て五物お作るおうれと譽おす注は言の杜預が云楚の

地務れ金利が志うり小牧古ハ銅を以て物又作さし又一説  
 小金ハ銅鉄の類と又洞冥記ハ武帝首山の銅抄採て始て鑄て刀と  
 すとあり予按るに日本の銅と異邦の銅と剛柔利鈍同くさるべ  
 し既又雲南の地銅知出すと夥多とつゞきも日本の銅をかき  
 ハ其用をささずと能き他邦の銅ハ強くして刀劔又作るとい  
 とも唯人知刺のとも老用知ぬる也其以昔の説又從て黄金を加  
 る又ある一説又ハる産ふ金を以て造る等といふの説又さして金  
 いう事の擲名也是又物りて苦ふあると心得るハ大又遠て天國正  
 宗及び助廣以下世又名ある上ユ黄金加かく造るる一とるて其  
 難く亦今の世のユふして古ハ優るる夫其黄金の用をさし鐵  
 ハ鐵の用知するつゞきして剛也擲て物の堅固ふして飽まて剛  
 を用る事本とすと知るをし

或問先小疵の一絲ハ端ずといつゞきも世小地金の疵ハ許す事阿  
 て又中の疵ハ少しの疵も忘るふあるは子然るを起し  
 答云又ハ物知断を主とし敏しと指悉る起しハあハ地鐵其五  
 抱一堪るの力とある也志うれハ又の中の疵ハ地中の疵を忘  
 し無疵の道具ハ稀あるりの也聖令始の弊も後ハ孔る疵も  
 有るし又取れたる疵を隠す術も數有べし切者ハあはれハ見  
 かくしし叔又槌彫物ある乃々も劔の全終關る意あるあるハ地  
 又其ハ小疵の物ハ用ひて國用知あすべし  
 或問作の真偽を辨ひて正し物知用ゆるハ當然たるたさハ似物  
 皆なるとも又其の功復すく成就せしハ何ぞ出偽不泥ん式既小疵  
 として始貞宗と極し物知宗と極直しあとするる者といつゞき其作の  
 物たる知辨ひ得ずハ偽作の宜知を得て其銘を削去て拾料と為

て可あらずや専ら生偽を編する時ハ一旦後ある人の手に偽物  
 とおもへたる老子載の後まで埋まらん歎くすやいん  
 若云劔を相する干要の事案は者劔八角といふに通じ人  
 取てハ獸の角の如く人の角也又牙也白石の祝不越の敦賀の郡古  
 ハ角鹿郡といひし切つるごとくいふあまはつる也八角といふ通  
 して獸の角の尖ある不聲てつる也といふある處しと志うまハ人  
 の身す生する如たの重也牙の及ふを祝ハ心切用ひ能く撰  
 祇造る者の優劣を自得して心不一點の疑なく鑑令りある強敵  
 鬼神たるもは劔を以て降伏すべしと一変する程の劔あらず  
 ハ身守るの悪ハあまうらん歎く是は後治の名のとおぼし  
 用る時ハ偽物も劣る者者し其上作の良劔を得るも末うま  
 ハ外に價の貴くも劣る中にも撰取を其工たふ記す

山城

金道伊賀守 久道近江守 正俊越中守 正俊石堂右 吉道丹波守

至六代之間 金道和泉守 在吉阿波守 國路出羽右 信吉信濃守

金道川条坂 國義高井豊 國時城州住 義國川条坂 則國平安城

長吉上同 弘章上同 重次鞍馬 慶次鞍馬 元道平安城

忠國信濃右

大和 國武和州住 包國越中入 助包上野守 國吉越中守 包重和州住

攝津 國平真改弟 貞則真改門 貞次伊賀守 國康肥後守 國重鬼神丸

輝政陸奥守 清信正田 助廣ソボロ 國貞初代 助高津田之

助宗上同 廣政若狭守 吉道丹波守 兼道丹後守 吉行陸奥守

吉國上野守 兼光但馬守 包貞越後守 忠綱粟田口 正綱一子

長綱上同 忠行上同 康廣大坂名堂 為康陸奥守 康永河内守

康綱又任干 長章多 羅信吉高井 包宗上野守 兼増播磨守

包道 伊賀守 國維 相摸守 宗重 常陸守 貞廣 高柳 祐國 花房

弘包 信濃守 國幸 根州佐 則廣 相摸守 忠重 生玉

武藏 正國 法城寺 正弘 上同 貞國 上同 吉次 上同 國光 上同

是 一石堂左 光平 出羽守 常光 對馬守 吉武 出雲守 安室 大和守

安倫 元奧州 兼重 上總介 繼平 後代 秀辰 山城守 吉正 武州佐

守久 石堂秦 守正 和泉守 東連 石堂秦 正照 法城寺 廣國

加賀 勝國 陀羅尼 勝家 上同 兼若 加州佐 兼卷 上同 清光 播磨守

越前 兼定 上野守 國清 山城守 重高 播磨大 宗次 下坂 康繼 上同

兼中 武藏守 正則 大和 貞次 日向守 永國 河内守 光廣 下坂

因幡 兼光 有二代 兼次 有二代

尾張 信高 伯耆守 信照 伯耆守 氏房 飛騨守 氏善 若狹守 盛道 武藏守

貞廣 大山 盛道 駿河守 盛道 加賀守 貞廣 大山 佐

美濃 照門 丹波守 吉門 武藏守 兼高 陸奥守 清宣 備中守 清宣 近江守

兼信 陸奥守 康道 大和守 正全 豐後守 金藏 大和守

播磨 金重 迷陽 氏重 大和 大國重 津田 右作 又曰宗 貞重 播磨佐

備前 祐宣 兵衛二人 上野大 孫二人 與三 兵衛 國宗 茂右衛

正成 又銘 多門 兵衛 正次

安藝 輝廣 肥後守 則房 源 幸慶 輝廣 播磨守 廣隆

筑前 守次 是次 實次 安吉 源 重宗 信國

吉包 信國 吉貞 信國 重包 上同 吉次 上同

豐後 重行 高田 義行 上同 貞行 上同 國行 上同 統行 上同

豐政 上同 行長 上同 吉行 上同 國平 上同 國際 豐後國

肥前 忠吉 二代 以 忠廣 近江大 正廣 河内大 正永 備中大 行廣 出羽守

菊平 伊賀守 吉廣 伊勢大 兼廣 大和守 宗次 伊豫守 宗安



答云、あるものも、おぼろげに以て之を乞ふに道に於て難し、利を乞ふに於て難し、天罰を得ず、縁滅絶せしむるに、乞ふる悪人の多きより、大に得ざる事、おぼろげに以て之を乞ふに、

或曰、世に利者と稱し、其作を、價の卑を得、或は廉者を得て、巧み、廉者、敵い、黄金を貪るの人は、其は又も商人より、等し、其れも、亦、其、當、不、混、合、人、の、類、なるべし。

答云、抑、吾邦、神聖の教、ハ、正直を本として、偽、詐、の、徳、す、偽、道、釋、氏、の、教、は、餘、れ、其、中、の、及、で、ハ、一、也、況、や、其、徳、を、不、武、臣、と、して、武、臣、の、可、者、地、を、す、ん、を、買、取、か、ん、と、日、來、心、神、任、年、

久し、甲、乙、者、あ、れ、は、其、知、る、所、を、以、て、示、す、凡、物、を、得、ん、と、為、せ、ん、人、を、得、て、其、中、の、所、を、決、定、す、べし、其、名、は、不、す、べし、或、問、古、人、の、曰、く、ハ、惟、舊、を、お、も、む、器、ハ、舊、に、求、む、に、非、ず、惟、新、を、お、も、む、

と、云、ふ、た、其、之、を、以、て、其、を、飲、れ、を、今、其、新、刀、の、如、く、ハ、色、少、似、り、然、れ、も、昔、時、す、く、極、む、る、極、治、事、也、ま、し、く、後、世、あ、れ、は、其、下、々、の、治、工、を、難、す、る、も、亦、久、し、其、良、徳、を、能、ハ、令、ん、と、お、ら、む、其、道、を、知、れ、る、也。

或曰、善哉、曰、く、予、は、比、勤、勞、の、途、を、以、て、強、治、保、則、ある、者、を、以、て、予、が、所、する、所、を、能、く、志、む、る、に、其、物、古、物、な、る、を、不、す、と、い、は、取、ら、ず、其、の、一、刀、を、得、り、仍、て、其、堅、固、書、し、そ、子、不、示、え、ん。

鍛煉法 またいの

○第一備、炭の細激あるを、去り、大なるを、宛、能、持、ひ、たる、を、用、ひ、火、油、及、む、土、ハ、山、城、の、油、草、山、福、山、の、土、油、を、飛、して、用、ゆ、炭、を、焼、て、用、ゆ、あ、い、ま、の、清、水、を、砂、又、ハ、相、二、重、ま、て、焼、て、用、ゆ、相、報、ハ、又、ハ、束、の、肘、を、至、て、鉄、槌、と、ま、り、の、肘、用、ゆ、は、鉄、槌、ハ、叙、不、作、る、不、の、鉄、交、る、



土を懸て大練し取出し葉灰をくもて得と練合て地又打合す此  
標之度小しと一川ふなる也

○第五上鏢 三度ぐり鏢すをいふは時ハ鏢土赤し不灰けを付  
るやめ也

○第六伸鏢 軽く焼て打伸し又軽く焼てハ打伸る也は時ハ鏢土  
を申ひす灰け加付るとその如し凡式尺五寸の鋳を造んとあ  
む式尺三寸余少伸し幅ハむかり厚四分程又尺毫を双方の角  
平める如錫の角を来て惣幅凡毫寸式分程又赤して鋳の姿鋒の形  
造立る也

○第七水打 少しつ焼てハ復鏢小ぬ加付打はの如して欲する  
所の寸尺少伸る也ぬ打ハ本鐵をぬ小ぬが為也ぬ又是れを  
鏢能練り潤も出る也一人の小鏢を打亦お能加する有り

は不至るまで束の事如述る也板目柾目の子本捲半捲甲伏居造  
等の仕方あり又地鏢ハ種々加つ造る事有る鏢ハ良鏢ハ非  
為切がし故又鏢ハ精粗ありといふとも畧せる不五七度良鉄  
を鏢ひ用ゆ是甚ぶ畧法也

○第八鉄透 夫より寸尺姿を極て鉄よりくむるやく削立る也

○第九又土 土を能く摩ぬ飛して粘力有粘りして用ゆを大少油  
氣を忌削立たる刀より手油の氣の赤起やうに吹味すべし叔斯の  
如くふして刀不土如塗好む所の模様ニ双方の土如竹篋を以て  
す土の赤起種ハ又とむる土の有ふハ地鏢とあるは時専ら土と金  
との合不台土の厚薄篋かけ不ありとむる様不考不模様能出来て土  
水を落くして又の上一面不流し懸起分むる如起様不する也土に  
か入りの不産家不すありて如ある産し懸起とも土より金とる也

摸標の事昔ハ大子不<sup>レ</sup>した里近世不<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>て失<sup>レ</sup>たるが如<sup>ク</sup>し御<sup>レ</sup>久<sup>ク</sup>の番<sup>レ</sup>銀<sup>レ</sup>治<sup>レ</sup>を以<sup>テ</sup>て見<sup>レ</sup>れハ丁<sup>子</sup>乱<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>大事<sup>ト</sup>とす

○第十又渡 先<sup>ニ</sup>火<sup>ヲ</sup>改<sup>メ</sup>ぬ齊<sup>シ</sup>あ<sup>ハ</sup>毎<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>清<sup>ク</sup>ぬ七<sup>ハ</sup>分<sup>ハ</sup>湛<sup>レ</sup>一<sup>ニ</sup>並<sup>レ</sup>炭<sup>ヲ</sup>を山<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>積<sup>ル</sup>火<sup>ヲ</sup>を熾<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>息<sup>ス</sup>甚<sup>ク</sup>大<sup>切</sup>の所<sup>也</sup>扱<sup>レ</sup>治<sup>ル</sup>あ<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>ハ水<sup>火</sup>の力<sup>迅</sup>く又<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>れ<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>故<sup>ニ</sup>回<sup>キ</sup>違<sup>ヒ</sup>有<sup>テ</sup>あ<sup>ハ</sup>如<sup>ク</sup>温<sup>セ</sup>る星<sup>ヲ</sup>を燒<sup>ク</sup>又<sup>ハ</sup>の湯<sup>加</sup>減<sup>ト</sup>と号<sup>ス</sup>す扱<sup>レ</sup>鈕<sup>本</sup>す<sup>ハ</sup>全<sup>ク</sup>能<sup>マ</sup>す<sup>テ</sup>材<sup>亦</sup>く燒<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>湛<sup>ル</sup>糸<sup>ノ</sup>のあ<sup>ハ</sup>子<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>して燒<sup>ル</sup>每<sup>渡</sup>一<sup>終</sup>多<sup>ク</sup>也<sup>也</sup>扱<sup>レ</sup>の大成<sup>ハ</sup>誠<sup>ハ</sup>天<sup>人</sup>妙<sup>合</sup>の業<sup>神</sup>力<sup>ノ</sup>の加<sup>ル</sup>る所<sup>性</sup>さ<sup>る</sup>登<sup>け</sup>ん或<sup>ハ</sup>扱<sup>レ</sup>及<sup>ノ</sup>の過<sup>タ</sup>るハ火<sup>ヲ</sup>す<sup>テ</sup>間<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>て及<sup>ヲ</sup>を度<sup>ス</sup>又<sup>ハ</sup>味<sup>ノ</sup>利<sup>純</sup>も<sup>ハ</sup>は間<sup>ヲ</sup>す<sup>テ</sup>差<sup>有</sup>る<sup>也</sup>

○第十一中心 銳<sup>ク</sup>す<sup>テ</sup>格<sup>好</sup>よく削<sup>リ</sup>至<sup>テ</sup>銳<sup>ク</sup>又<sup>ハ</sup>終<sup>ニ</sup>鑪<sup>子</sup>を懸<sup>ク</sup>右<sup>鑪</sup>龍<sup>丸</sup>鑪<sup>丸</sup>羽<sup>志</sup>の筋<sup>遠</sup>き<sup>至</sup>海<sup>若</sup>あ<sup>ハ</sup>里<sup>中</sup>傳<sup>ノ</sup>の後<sup>世</sup>不<sup>レ</sup>残<sup>ル</sup>物<sup>也</sup>鑪<sup>丸</sup>加<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>て尺<sup>所</sup>の一<sup>ト</sup>す意<sup>ヲ</sup>を申<sup>ヒ</sup>すん<sup>モ</sup>有<sup>ル</sup>ん<sup>ハ</sup>凡<sup>ハ</sup>中心<sup>傳</sup>來<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>

摩<sup>立</sup>て目<sup>釘</sup>穴<sup>ヲ</sup>を指<sup>維</sup>ふ<sup>テ</sup>あ<sup>け</sup>る目<sup>釘</sup>穴<sup>古</sup>く<sup>モ</sup>目<sup>貫</sup>元<sup>と</sup>す

○第十二銘切 平<sup>鑽</sup>小<sup>シ</sup>て磨<sup>ク</sup>滑<sup>キ</sup>有<sup>テ</sup>細<sup>鑽</sup>少<sup>ク</sup>細<sup>ク</sup>滑<sup>キ</sup>あ<sup>ハ</sup>里<sup>彫</sup>銘<sup>又</sup>する<sup>ハ</sup>逆<sup>撥</sup>隱<sup>撥</sup>す<sup>テ</sup>目<sup>釘</sup>銘<sup>ス</sup>する<sup>鑪</sup>治<sup>も</sup>あり<sup>さ</sup>ら<sup>く</sup>と<sup>す</sup>る

手の鑽<sup>者</sup>深<sup>ク</sup>插<sup>付</sup>し<sup>テ</sup>切<sup>あ</sup>里<sup>支</sup>の肩<sup>下</sup>り<sup>か</sup>い<sup>ハ</sup>より<sup>有</sup>何<sup>も</sup>も<sup>作</sup>者<sup>ノ</sup>尺<sup>亦</sup>と<sup>り</sup>も<sup>多</sup>也<sup>は</sup>小<sup>至</sup>て生<sup>ス</sup>十五<sup>枚</sup>刀<sup>劍</sup>成<sup>就</sup>す<sup>後</sup>久<sup>ハ</sup>新<sup>刀</sup>の打<sup>却</sup>す<sup>能</sup>切<sup>多</sup>也<sup>後</sup>世<sup>不</sup>至<sup>ス</sup>と<sup>思</sup>未<sup>カ</sup>し<sup>と</sup>論<sup>じ</sup>又<sup>ハ</sup>後<sup>集</sup>す<sup>鑪</sup>治<sup>也</sup>の術<sup>ハ</sup>中<sup>家</sup>又<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>も</sup>れ<sup>ハ</sup>兼<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ば<sup>と</sup>は<sup>二</sup>銳<sup>上</sup>と<sup>ハ</sup>道<sup>辭</sup>不<sup>レ</sup>似<sup>タ</sup>る<sup>也</sup>里<sup>手</sup>扱<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>を相<sup>ス</sup>す<sup>ハ</sup>也<sup>扱</sup>を離<sup>レ</sup>造<sup>ル</sup>の術<sup>に</sup>似<sup>タ</sup>る<sup>ハ</sup>す<sup>ん</sup>も<sup>有</sup>る<sup>也</sup>らす<sup>鑪</sup>治<sup>者</sup>の弓<sup>製</sup>を志<sup>す</sup>醫<sup>師</sup>の藥<sup>製</sup>を志<sup>す</sup>が<sup>如</sup>し<sup>仍</sup>て<sup>今</sup>子<sup>々</sup>同<sup>又</sup>愈<sup>且</sup>日<sup>好</sup>初<sup>心</sup>不<sup>レ</sup>示<sup>ス</sup>と<sup>云</sup>爾

磨事

夫<sup>磨</sup>ハ<sup>劍</sup>の利<sup>純</sup>得<sup>失</sup>の繫<sup>多</sup>所<sup>あ</sup>れ<sup>ハ</sup>磨<sup>師</sup>の上<sup>手</sup>す<sup>ハ</sup>て<sup>志</sup>う<sup>も</sup>

行<sup>ノ</sup>詳<sup>是</sup>

卷一

十五

大<sup>新</sup>考<sup>新</sup>考

ノ百<sup>餘</sup>ノ下<sup>ノ</sup>子<sup>々</sup>の<sup>後</sup>

直ある者か撰でしてを不<sup>ふ</sup>但<sup>た</sup>て價<sup>あひ</sup>を<sup>と</sup>取<sup>と</sup>るもむ<sup>も</sup>し然<sup>しか</sup>る時<sup>とき</sup>ハ砥<sup>あ</sup>磨<sup>ま</sup>法の<sup>り</sup>  
如<sup>ごと</sup>く者<sup>もの</sup>が十<sup>じゅう</sup>條<sup>じょう</sup>日<sup>にち</sup>を磨<sup>と</sup>る佳<sup>よ</sup>作<sup>さく</sup>の妙<sup>めい</sup>不<sup>ふ</sup>知<sup>ち</sup>頭<sup>ず</sup>し實<sup>じつ</sup>毛<sup>もう</sup>を吹<sup>ふ</sup>か如<sup>ごと</sup>く米<sup>こめ</sup>就<sup>す</sup>  
す<sup>す</sup>不<sup>ふ</sup>直<sup>ちやく</sup>なる者<sup>もの</sup>に磨<sup>と</sup>る或<sup>ある</sup>ハ他<sup>た</sup>の價<sup>あひ</sup>の如<sup>ごと</sup>きハ大<sup>おほ</sup>又<sup>また</sup>又<sup>また</sup>の利<sup>り</sup>切<sup>き</sup>失<sup>し</sup>ふの<sup>り</sup>  
とあらず砥<sup>あ</sup>磨<sup>ま</sup>法<sup>り</sup>を思<sup>おも</sup>ひ或<sup>ある</sup>ハ大<sup>おほ</sup>知<sup>ち</sup>以<sup>も</sup>て燠<sup>あつ</sup>め利<sup>り</sup>劍<sup>けん</sup>を鈍<sup>鈍</sup>りし<sup>る</sup>磨<sup>と</sup>る速<sup>すみ</sup>不<sup>ふ</sup>  
世人<sup>よじん</sup>知<sup>ち</sup>して殆<sup>たいてい</sup>ど迷<sup>まよ</sup>ハ<sup>ハ</sup>中<sup>ちゆう</sup>直<sup>ちやく</sup>を貪<sup>あま</sup>む故<sup>ゆゑ</sup>不<sup>ふ</sup>良<sup>りやう</sup>器<sup>き</sup>を得<sup>え</sup>んとあらず必<sup>かならず</sup>  
其<sup>その</sup>人<sup>ひと</sup>を撰<sup>せん</sup>で平<sup>へい</sup>意<sup>い</sup>を利<sup>り</sup>し磨<sup>と</sup>る者<sup>もの</sup>も亦<sup>また</sup>中<sup>ちゆう</sup>直<sup>ちやく</sup>を迷<sup>まよ</sup>す價<sup>あひ</sup>を求<sup>もと</sup>め敢<sup>あへ</sup>て法<sup>り</sup>則<sup>そく</sup>  
不<sup>ふ</sup>肯<sup>けん</sup>うさざるあり本<sup>ほん</sup>意<sup>い</sup>あらずんか  
又<sup>また</sup>肉<sup>にく</sup>のり早<sup>はや</sup>又<sup>また</sup>上<sup>じやう</sup>工<sup>こう</sup>の磨<sup>と</sup>る不<sup>ふ</sup>得<sup>え</sup>ざるがれハ中<sup>ちゆう</sup>利<sup>り</sup>切<sup>き</sup>失<sup>し</sup>ひ中<sup>ちゆう</sup>精<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>を隠<sup>かく</sup>す板<sup>ばん</sup>  
の如<sup>ごと</sup>く不<sup>ふ</sup>肉<sup>にく</sup>の磨<sup>と</sup>る道<sup>みち</sup>たるを落<sup>お</sup>れ<sup>お</sup>ろく<sup>ろく</sup>と損<sup>そん</sup>多<sup>た</sup>し又<sup>また</sup>又<sup>また</sup>肉<sup>にく</sup>丸<sup>まる</sup>きハ喰<sup>く</sup>留<sup>りゅう</sup>  
る心<sup>こころ</sup>者<sup>もの</sup>切<sup>き</sup>鈍<sup>鈍</sup>し又<sup>また</sup>肉<sup>にく</sup>の西<sup>せい</sup>きハ多<sup>た</sup>くハ地<sup>ち</sup>鉄<sup>てつ</sup>を強<sup>つよ</sup>く磨<sup>と</sup>るし又<sup>また</sup>鐵<sup>てつ</sup>の方<sup>かた</sup>  
むりりして丸<sup>まる</sup>く米<sup>こめ</sup>たるりの如<sup>ごと</sup>く切<sup>き</sup>すか<sup>か</sup>奴<sup>やつ</sup>也<sup>なり</sup>根<sup>ね</sup>切<sup>き</sup>者<sup>もの</sup>不<sup>ふ</sup>使<sup>た</sup>る<sup>る</sup>を<sup>し</sup>  
砥<sup>あ</sup>磨<sup>ま</sup>次<sup>じ</sup>序<sup>しよ</sup>

折<sup>お</sup>枕<sup>まくら</sup> 京<sup>きやう</sup>大<sup>だい</sup>坂<sup>ばん</sup>よりハ荒<sup>あ</sup>砥<sup>と</sup>といハ深<sup>ふか</sup>き磨<sup>と</sup>る打<sup>うち</sup>下<sup>げ</sup>の草<sup>くさ</sup>押<sup>おし</sup>又<sup>また</sup>ハ漆<sup>しやく</sup>漆<sup>しやく</sup>

神<sup>い</sup>子<sup>この</sup>濱<sup>まは</sup> 志<sup>し</sup>磨<sup>ま</sup>磨<sup>ま</sup>す其<sup>その</sup>後<sup>ご</sup>昔<sup>むかし</sup>より出<sup>で</sup>るといハ  
江<sup>え</sup>都<sup>と</sup>よりハあ<sup>あ</sup>びあ<sup>あ</sup>といハあ<sup>あ</sup>の石<sup>いし</sup>の物<sup>もの</sup>あり

ウナカミ 京<sup>きやう</sup>大<sup>だい</sup>坂<sup>ばん</sup>の又<sup>また</sup>大<sup>だい</sup>の濱<sup>まは</sup>の代<sup>しろ</sup>ハ田<sup>いん</sup>中<sup>ちゆう</sup>實<sup>じつ</sup>本<sup>ほん</sup>より出<sup>で</sup>る田<sup>いん</sup>中<sup>ちゆう</sup>おし枕<sup>まくら</sup>  
の砥<sup>あ</sup>磨<sup>ま</sup>目<sup>め</sup>を研<sup>と</sup>磨<sup>ま</sup>す也<sup>なり</sup>

常<sup>じやう</sup>見<sup>けん</sup>寺<sup>じ</sup> 神<sup>い</sup>子<sup>この</sup>の濱<sup>まは</sup>より出<sup>で</sup>る砥<sup>あ</sup>磨<sup>ま</sup>目<sup>め</sup>を石<sup>いし</sup>横<sup>よこ</sup>糸<sup>いと</sup>志<sup>し</sup>の砥<sup>あ</sup>磨<sup>ま</sup>す<sup>る</sup>也<sup>なり</sup>  
より越<sup>こ</sup>前<sup>ぜん</sup>の園<sup>えん</sup>より出<sup>で</sup>るといハ

名<sup>な</sup>倉<sup>くら</sup> 二<sup>に</sup>品<sup>ひん</sup>あり申<sup>まを</sup>あ<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ハ備<sup>び</sup>違<sup>ちが</sup>ふ磨<sup>と</sup>る者<sup>もの</sup>の砥<sup>あ</sup>磨<sup>ま</sup>目<sup>め</sup>を<sup>と</sup>磨<sup>ま</sup>す<sup>る</sup>  
細<sup>こま</sup>名<sup>な</sup>倉<sup>くら</sup>ハ磨<sup>と</sup>る<sup>る</sup>研<sup>と</sup>磨<sup>ま</sup>す<sup>る</sup>中<sup>ちゆう</sup>名<sup>な</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>の砥<sup>あ</sup>磨<sup>ま</sup>目<sup>め</sup>を磨<sup>と</sup>る<sup>る</sup>也<sup>なり</sup>

浅<sup>あ</sup>黄<sup>わう</sup> 昔<sup>むかし</sup>ハ上<sup>じやう</sup>品<sup>ひん</sup>多<sup>た</sup>しゆ<sup>ゆ</sup>地<sup>ち</sup>磨<sup>と</sup>る磨<sup>と</sup>る上<sup>じやう</sup>引<sup>ひ</sup>共<sup>ども</sup>又<sup>また</sup>ハ砥<sup>あ</sup>磨<sup>ま</sup>目<sup>め</sup>を<sup>と</sup>磨<sup>ま</sup>す<sup>る</sup>  
研<sup>と</sup>磨<sup>ま</sup>す<sup>る</sup>といハ上<sup>じやう</sup>品<sup>ひん</sup>の細<sup>こま</sup>な<sup>な</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>世<sup>よ</sup>より出<sup>で</sup>る此<sup>こゝ</sup>磨<sup>と</sup>る<sup>る</sup>也<sup>なり</sup>

不ふ起故地又其又白礪を以て  
枇杷砥 林礪ともいふ浅黄の地礪上糸ふき故不此砥を代小用ゆ  
是上品ハハなし

内一曇 且又近世上品出せりるる三糸以來中糸出ると以て刃礪  
小用ひぬ礪小用てハ地礪とも用ゆ因らり室ハ古風又  
研の礪也

白一礪 浅黄枇杷田曇若の上品得るは起ゆは礪を以て合を研  
を以てす

上引 あせだうも早も白木の波を一つらく小磨く多る也每面  
又室望氣の石肌を摩磨し指先ふりけ礪礪に用ゆ切先  
のあるものも用ゆ也

對馬礪 對馬の海邊より出るは起ぬ末又して故麻の油小合せて

磨 芳堅砥まで絞置中油を以て拭を入る也  
對馬礪のけりて拭を以て細礪の研針少く鉏と筆と研磨  
あり打彩も油氣取て若磨き乾ゆまで磨也

研法ハ古作新刀小すべし色以若法教品者と雖も古法ふる可  
らす近世鑄肌拭といふ事あり是ハ鋸の耐鑄石の邊へ散たる鉄皮  
へ換鑄縁鑄を加へ焼細末よして油小合を對馬礪の代小を以て拭速  
よ入る仕方也は又の本躰を失ひ惡むる起の甚しき也從て今古法  
の畧も書す

刃一躰の格好ハうさうみ常々を以て刃肉切先ハ克定ぬ相名念  
を以て古法の如く凄々糸ぬめて常々寺の礪目残りづる標小磨又白  
肉曇よて名念の起目強くも標又研地礪よ上糸の浅黄り又ハ  
浅黄あらんむ上糸の標礪を指の先小付又の模標ハかしも懸るが

新刀辨疑

卷一

水音書藏

新刀辨疑

水音書藏

る稱又地鏡の所をかり延分念を入推標形不持て磨之是地鏡之  
 云然くべれハ拭取く入ざる故也拭ハ磨る延の上品製出来たる也  
 奉書紙の切木跡少漫し指して又ハ然く磨るやうに地鏡初なる也  
 拭速まつべれハ又の上様で思き初地鏡別念を入る也拭ハ  
 磨く入磨磨し磨上ると拭ハ濃くゆるると心得磨し又又の上ハ又艶  
 を初め又白内墨を研しおくふして研ハ拭の色移るざるをよし  
 ます斯即方信のち也

劔工畧系

三条小鍛冶宗近嫡流埋忠明壽門葉系

○橘宗近

父ハ從四位下播磨守橘仲遠ト云宗近始ハ仲  
宗ト云信濃大掾ニ任ス法貞院兼家公ニ任フ

吉家

大和掾ニ任ス上東  
門院ニ任工奉ル

吉輔

右兵衛尉  
奉仕上同

仲義

帶刀ヲ  
預ル

義近

山城

義利

山城

大目利重

左京

重道

右衛門尉後道ヲ元ニ改  
△入道忠實公ニ奉仕ス

重家

關白忠道  
公ニ奉仕

家義

瀧口ヲ預  
奉仕上同

近重

兵庫外  
上ニ同シ

重遠

宮内  
ト号

稻荷社抽  
宮ヲ預ス

重仲

彦次郎後兵庫外ト  
云富小路御所ニ任

重定

後宇多院衛  
士右衛門

重昭

彦次郎六  
波羅住

重光

宮内  
六波

羅住  
重正

伊織後彦次郎ト云足利  
將軍義詮公ニ奉仕ス

重義

彦次郎義ヲ吉ニ改義満  
公ノ命ニ從テ鐔多造ル

重宗

彦之進義持公  
義教公ニ奉仕

又刀劔多  
ノ造ル

重近

彦次郎ト云義  
教公ニ奉仕ス

重久

彦次郎ト云義政公  
義尚公ニ任一奉ル

宗重

彦左衛門尉ト号ス義植  
公義澄公ニ任一奉ル

重之

彦右衛門尉  
義澄公ニ任

重隆

彦次郎ト云義晴公義輝  
公義昭公及ヒ信長公ニ任

○重吉

宗近二十五世也明壽彦  
次郎ト云足利義昭公及

豊臣秀吉公秀次公ニ奉仕ス堀川國廣肥前忠吉  
大坂國貞國助等ノ師也 門人ノ系列ニ記ス

家隆

彦次郎ト云法橋明真ト改  
△劔刀鐔ノ銘ハ重義ト云

重長

彦右  
衛門 宗之

彦左衛  
門尉

宗茂

七左衛門尉  
鐔ノ上手也

重幸

儀左衛門  
同鐔ヲ缺

重榮

信濃後頼母ト改  
此亦鐔ヲ鍛フ

良久

梅忠權左衛門  
今時ノ人

右系ハ安永六丁酉の癸六月良久自書テ以贈ス

明壽國廣國貞國助等系

○明壽 宗近九五世胤重吉也  
即埋忠之祖也平安  
西陳ニ住ス秀吉公四糸室町  
ニテ居所ノ地ヲ給フ慶長以  
來新刀之始也

忠吉 橋本新左衛門尉肥  
前國住人也系列在

國廣 洛陽一糸堀川住信  
濃守藤原國廣來ノ  
未ニテ埋忠ノ門人トナル

國安 國廣カ弟ト云疑ラ  
クハ國改ト同人歛

國改 國安ガ  
初名欽 正弘  
大隅守世ニ  
國改カ子ト云

國貞 和泉守藤原國貞於大坂造之ト銘スルモ同人也國廣  
カ弟子ニテ真改カ父也入道シテ道和ト号ス

國儔 越後守藤原國儔也子孫ナシ平安  
城ノ住ニテ國廣カ門人ナリ

在吉 阿波守在吉國廣カ弟子  
ナリ京都ニ住ス

埋忠吉信寛永中ノ作有又埋忠大和守吉信元禄中  
ノ作有長壽ニテ同人ノ作ナルヤ大和守ハ二代目  
ナルヤ未詳 埋忠彦兵衛 埋忠彦市 右三人ハ  
明壽明真二代ノ次男三男又ハ門人ナルヤ未詳  
梅忠傳三郎美平埋忠門人ニテ若年ノ比ハ埋忠同  
居後洛北塔壇ニ住ス故アリテ師ト義絶ス又東山  
菊水井邊ニ移居ス仍テ東山美平ト銘ス老後大江  
慶隆ト切ル小早川隆景ノ遺流ト云梅忠良久曰美  
平ハ明壽カ門人ニテ受領ノ故アリテ勘氣スト予  
按ニ然ラサル乎明壽ハ寛永七年七十三也美平ハ  
正徳中迄存生也然ハ明壽カ子法橋明真重義カ門  
人ナルベシ重義ヲ家隆ト云ハ師ノ一字ヲ用シカ  
小早川ノ隆ヲ用シカ可否知ベカラズ

真改 井上和泉守國貞  
カ道号也

國貞 國右衛門ト云  
子孫日州飯肥  
ニ在

貞則 鈴木加賀守後奥州へ下ル佐右衛門ト  
云子孫彼所ニ住スト云

真了 土肥真了後肥前平戸へ行子孫相續テ  
肥前ニ在

國助 弟子也大坂之初代ナリ攝州住  
助廣之師也

國路 右ニ同出羽大掾初代  
藤原來ト銘スルハ出來物也

國幸 右ニ同攝州尼ヶ崎住藤原國幸

國武 右ニ同平安城住國武

國路 二代父ニハ劣レリ

國路 三代父同様

國助 小林河内守世ニ中河内ト称ス

國次 武藏守  
國康 銘父ニ  
同文字

國康 肥後守上作也  
父ヨリツマレリ  
後江戸ニ住ス

國輝 小林伊勢守若年ノ比隼之進ト  
銘ス又國英ト切シコトアリ

治國 八幡北窓治國ト銘ヲ切摠兵衛ト云  
貞則ト同ク真改カ地録ヲ鍛フ

國平 真改カ弟子後  
日向へ行

國富 右ニ同日向國住人大坂ニ  
於テ打シモノ多シ

國義 右ニ同下總守ニ任ス  
伴之丞ト云

貞國 右ニ同弟子中ノ下工也  
攝州住藤原貞國ト銘ス

貞信 右ニ同但馬守橋貞信ト銘ス  
世ニ希ナリ

貞次 右ニ同伊賀守貞次ト切鈴木加賀  
守貞則カ弟ニテ甚右衛門ト云

國義 和田彈正忠源國義  
後ハ和泉守トモ切

國助 三代

國義 門人也攝州住源國義ト銘ス後ハ備  
前守ト切鎗長カノ上作

○助廣 撰州住藤原助廣ト銘ス後ハ越前守ト云世ニソボロト云

助廣 甚之丞初ハ越前守助廣ト銘ス父ノ銘ニ殆ト似タリ見分ル所アリ寛文中ハ楷書迄寶二年ヨリ近衛流ニ銘ヲ切ル

助直 本近江國野洲郡高木邑人也孫大夫ト云仍テ江州高木ト銘人助廣之妹智トナル正宗貞宗ホカ傳ニ似タリ

助政 淡路國ノ住人ナリ鉦木大和守助政ト銘ス

○輝廣 肥後守藤原輝廣ハ藝州播磨守カ父也或曰本國尾張ニテ福嶋家ニ從フ後又上京ニテ埋忠明壽カ弟子トナリシトキク其作國廣明壽等ニ似タリ或人ノ説是ナラン

肥前國忠吉等系譜

國重 右ニ同池田鬼神丸撰州住ト銘スル多シ後奥州ヘ下ル

國隆 右ニ同豊後國森住山上播磨守也久留嶋ノ上工也

助包 撰州住助包權兵衛ト云後上野守菅原助包ト銘ス和州郡山ノ本多家ノエタニ時ハ大和守國武トキル

助信 右ニ同出羽守助信ト銘ス矢根ノ上手出羽守矢根ノ上手也

助重 出羽守矢根ノ上手也

廣政 弟子也若狹守源廣政ト銘ス源廣政トノミモ切シ

助宗 右ニ同撰州住助宗ト銘ス後備後福山ヘ行

助高 助宗カ弟ニテ助廣カ門人也亦後ニ福山ヘ下ル助宗ニ優ル助廣見物有

○道弘 橋本壹岐守ト云是忠吉家ノ祖也元龜天正ノ頃肥前國上佐賀長瀬ト云所ニ住ス今ハ昔長瀬ト云天正ノ末ヨリ佐賀城下今ノ長瀬町ニ住ス

忠吉 慶長元年上京埋忠明壽弟子ト成同年ヨリ新左衛門尉忠吉ト改寛永元年武藏大塚ニ任シ忠廣ト改是ヲ世三前ノ忠廣又武藏忠廣ト云寛永九年八月十五日死時ニ六十八歳

正廣 武藏大塚忠廣嫡女ヲ以弥七兵衛吉信ニ妻ス吉信カ嫡子佐傳次郎ハ忠廣カ外孫ナル故相續シテ忠吉ト云寛永二年ヨリ太守ノ命ニ從テ正廣ト改同十八年河内大塚ト受領ス寛文五年二月五日死時ニ歳五十

正廣 河内守 正永 備中 正廣 河内守

○行廣 弥七兵衛吉信カ二男九郎兵衛ト云寛永十六年ヨリ名乗ヲ切正保五年出羽大塚ニ任シ寛丈三年出羽守トナル天和三年五月廿七日死時ニ六十六歳

正次 右ニ同興左衛門ト云

廣次 右ニ同徳右衛門ト云

正秀 右ニ同傳右衛門尉ト云

忠廣 武藏大塚忠廣カ妾服ノ男也平作郎ト号ス寛永九年父武藏大塚死シ後名ヲ忠廣ト改此時十九歳是ヲ初代忠廣ト云肥前國近江大塚

行滿 初代行廣門人 忠太夫ト云

行廣 出羽守 行廣 治部丞後出羽守

廣任 初代行廣次男忠吉 孫一文字廣任ト銘 廣任 肥前國廣任ト切

行永 初代行廣弟子忠右衛門 尉ト云肥前國行永ト銘 行永 銘父ニ同

行滿 初代行廣門人 忠太夫ト云

藤原忠廣ト切寛永十八年近江大椽ニ任  
シ元禄三年忠廣正廣行廣ト同ク御長刀  
ヲ作ル元禄六年五月廿七日死時八十歳

**忠吉**

平作郎嫡子也新三郎ト云萬治三年陸奥大  
椽ニ任寛文二年陸奥守ニ轉ス貞享三年

正月二日死時二五  
十歳勝タル上手也

**忠吉**

新三郎ト云元禄六年忠廣ト改同十三年近江大椽ニ任シ寶永七年  
朝鮮信使へ下サル御太刀并ニ長刀ヲ忠吉正廣行廣三人ニ鍛ハ令

給フ式云右二代初  
忠廣後忠吉ト改ト

**忠吉**

按ニ陸奥守ハ一生忠吉ト切シナルベシ其故イカントナレハ父近江大椽  
元禄六年迄存命陸奥守ハ貞享三年父ニ先達テ死爰ヲ以考ヘ見ルベシ

**忠廣**

新左衛門ト云享保元年近江  
大椽ニ任ス後ハ近江守ト切

**忠吉**

今ノ近江守也 此系明和中得タリ按スル  
ニ今弥五郎ト切シハ此近江守カ子ナルベシ

**忠吉**

初代武藏大椽忠廣ト改暫ク土佐守ヲ忠  
吉トス是世ニ土佐忠吉ト唱フ

**忠吉**

土佐守カ子ニテ  
同國長崎ニ住ス

**廣貞**

相右衛門尉  
國廣 六郎左衛門尉

**兼廣**

大和  
大椽

**兼廣**

遠江  
守

**吉住**

越中  
椽

**吉貞**

初代忠吉別腹ノ兄  
兵部左衛門尉

**吉貞**

**吉貞**

内藏  
助

**吉久**

太郎兵  
衛尉

**廣貞**

相右衛  
門尉

**忠清**

新右衛門尉  
忠清 下総大椽

**忠宗**

相模  
守

**忠宗**

儀右衛  
門尉

**忠政**

織部丞

**吉長**

五左衛門尉  
吉長 武左衛門尉

**吉長**

**吉房**

浅右衛門尉  
吉房 七郎左衛門

**吉房**

**忠政**

源兵衛尉

**吉廣**

伊勢大椽  
吉廣 越前大椽

**氏廣**

**吉廣**

吉左衛門尉

**吉行**

新兵衛尉

**勝廣**

六左衛門尉  
勝廣 正右衛門尉

**廣國**

**吉清**

千左衛門尉  
廣重 左馬丞

**廣重**

**吉信**

初代忠吉聲跡七兵衛尉  
正廣行廣力父也

**宗長**

肥前彫工埋忠明  
壽弟也寛永頃

**吉長**

宗長カ子也トイフ  
彫上手明曆萬治比

**忠長**

吉長カ弟子トイヘリ  
寛文延寶元禄ノ頃

**忠吉初代之銘**

橋本新左衛門尉忠吉  
肥前國住人忠吉作

**二代**

肥前國住陸奥守忠吉  
肥前國武藏大椽藤原忠廣

**二代**

肥前國住近江大椽藤原忠廣  
忠吉ト切シコトナシ

**三代**

肥前國住陸奥守忠吉  
忠廣ト切シコトナシ

按スルニ河内嫡子タル中ノ作ハ忠吉ト切リ又古佐ノ初銘ニ  
忠吉ト切者本家ノ家督ノ後ハ極テ忠廣ト改ルト見ヘタリ  
薩摩新刀畧系

**氏房**

丸田兵右衛門ト云先祖ヨリ關ノ傳ヲ継キ江都ヨリ竹屋某十九者行テ相州正宗  
ノ傳ヲ説示シ書ヲ與エシヨリ其傳ヲ轉セシト也或云若狹守氏房濃州岐阜ヨリ

**正房**

丸田兵右衛門ト云薩州住藤原正房ト切又伊豆守藤原正房トモ銘ス後集ニハ惣  
左衛門ト出タリ何レカ是ナルヤ此作薩州ノ冠タリ亦直モ貴トシ

丸田

丸田

二十一

水戸藩書

正房

九田孝兵衛薩州住藤原正房ト銘  
ス主水正清ト同時代ナリ

正房

九田惣左衛門ト云シハ恐ラクハ此正  
房ガコトナラン薩州住藤原正房ト切

安行

伊豆守正房門人也橋口三郎兵衛ト云波平大和守安行ト銘ス大和鍛冶ノ傳ナリシ  
ガ正房ガ門人ト為テ兩流好ニ隨ト也其國ニ於テハ直賤シカラズト也菱桓ヤスリ

安正

二男也橋口兵右衛門ト云先祖正國以來ノ大和傳  
ヲ鍛ヒ相州傳用ヒズ波平安正ト四字銘菱桓鑑子

安廣

橋口清左衛門ト云安  
正カ嫡子也波平安廣  
ト銘ス安周カ弟子ニ  
テ大和傳ヲ鍛フ

安明

次男也橋口伊兵衛ト云銘ハ波平安明ノ四字師傳安廣  
ト同波平ハ薩州谷山郡谷山郷ノ地名ナリ

安國

四男也橋口三郎兵衛ト云安行ガ家督ト見ヘテ波平  
大和守平安國ト銘ス強キ出来ニテ尤上手也

安常

橋口四郎兵衛銘ハ  
波平安常

安周

橋口四郎左衛門  
波平安周ト切

安充

橋口四郎左衛門銘ハ  
波平安充

安氏

橋口甚之丞銘ハ  
波平安氏

安代

門人也薩州喜入郡喜入ニ住ス玉置小市郎又一平ト云主馬首ニ任ス薩州住一平  
安代ト切後ハ主馬首一平安代又ハ藤原朝臣ト銘スルモ有國人喜入ノ一平ト  
ヨブト也尤上工也

安貞

安代ガ子也山城守一平安  
貞ト切或安代ガ父也ト云

清方

伊勢守藤原清方ト銘ス目釘宛ノ上二十六葉  
ノ菊ヲ切京伊賀守金道ガ弟子トナルト云今  
年老ト聞

安有

薩州住一平安有

正清一家

正清

正房カ弟子也宮原清右衛門又ハ覺太夫ト改シト見ヘタリ初  
ハ薩州住正清ト切後ニ主水正正清ト銘ス故正房ヲ移セリ

正良

伊地知平覺ト云正良ガ門人也  
薩州住正良ト切當時ノ鍛冶元  
平正良別テ上手也

正近

正清子也宮  
原清右衛門

奥之氏族系

忠重

奥小左衛門ト云銘ハ奥和泉守忠重ト切若年ノ頃ハ秀興ト切後集ノ銘蓋ニハ主左  
衛門ト見ヘタリ是非知ベカラズ薩州鹿兒嶋ノ城下ニ住ス國人呼テ奥トイフ

元貞

奥次郎兵衛銘ハ  
薩州住元貞ト切

元平

奥小左衛門銘ハ  
薩州住元平ト切

國平

奥惣兵衛ト云薩州住國平ト銘ス後集ニハ次郎左衛門トモ云忠重ガ甥ナリト出  
タリイカバ有ヤ

正貞

奥小左衛門ト云ヨシ若忠重カ嫡子ニテ元貞カ兄ナラン乎銘ハ薩州住正貞ト切  
忠重以下都テ奥一家ハ銘ヲ継シ刀モ継切ル也

國貞

深川某若ハ後集ニ出シ奥幸左衛門ト同人ナルヤ國平ノ子ナルヤ不審

元武

薩陽士元平カ弟也

新刀ノ列位定ル後正房カ作敷品ヲ視ル又薩州新刀ノ系圖ヲ得實ニ正房正清ニ勝タルヲ知ル伊豆守正房ハ薩州中新刀ノ冠タル者ナリ

○重鎌 隅州高隈郷東次郎左衛門ト云 重鏡 重近 重吉

○國富 日向國 國義 國次 末次

備前國長船横山氏畧系

崇神天皇六年己丑春二月初テ劔ヲ鑄テ奉ル同秋八月再勅ニ依テ造ル 天氣ニ協ニヨリ位録ヲ給フ夫ヨリ代々宝劔ヲ作ル備前國湯掛郷板屋ニ居ル即今ノ長船是ナリ 仁德天皇御宇湯掛郷ニ崇神天皇ヲ勸請シ我業ノ祖神ト仰奉ル此年五穀大饒也所民大二統ヲ今猶松林ノ中ニ在リ古代ノ劔ニ銘ナク握テ後世柄ヲ用ル故中心ヲ摺作リ目貫穴ヲ穿ツ又諸國刀鍛治ヌクナリシ故我家ニハ中心ニ横山形ヲシルヌ是横山銘ノ縁也延徳ノ祐光ハ 一条院ノ御宇ノ友成二十三代ノ後胤也

○祐定 横山與三左衛門備前國住長船與三左衛門尉又備前國住横山與三左衛門尉トモ銘ス是則延徳ノ祐光カ嫡子ニテ祐定ノ初代永正中ノ鍛冶ナリ

祐定 長船源兵衛尉也 與三左衛門嫡子大永中

祐定 長船七郎右衛門ト銘ス 源兵衛嫡子也金吾中納言二百石ヲ給フ弘治中

祐定 長船藤四郎ト銘ス 實ハ源兵衛四男ヲ七郎右衛門養子トス天正比

祐定 横山重兵衛尉ト銘ス与三左工門次男

祐定 横山與三共衛尉後大坂住藤四郎ハ源兵衛カ四男ニテ七郎右工門養子トス今按城家督故有シ

祐定 長船七兵衛尉 藤四郎嫡子 寛永ヨリ萬治寛文中也延宝二年甲寅六月十日死時二十九十八歳

二 祐定 長船權左衛門作州 一行農具鍛冶ト成

三 祐定 天正比阿州徳嶋池 田城主中村右近臣

二 祐定 横山五郎

ト成三好郡池田任大西彦兵衛尉是也

三 祐定 長船源左衛門 門寛永比嫡子平左工門農具鍛冶トナル次男孫四郎無作三男房四男房六男源七郎無作七男源右工門農具鍛冶トナル八男源藏無作

四 祐定 長船惣左衛門寛文 中也次男六左工門

三 祐定 長船源左衛門 門寛永比嫡子平左工門農具鍛冶トナル次男孫四郎無作三男房四男房六男源七郎無作七男源右工門農具鍛冶トナル八男源藏無作

三男八左衛門皆作ナシ

祐定 仁左衛門作州津山 二テモ鍛フ元録中

祐定 五男横山源之進享保七年壬寅十月七日死時二十七歳次男安次郎他家ヲ継三男源左衛門無作

横山河内守源祐定ト受領ス

祐定 之進享保七年壬寅十月七日死時二十七歳次男安次郎他家ヲ継三男源左衛門無作

祐定 横山七郎右衛門享保比也

祐定 之進享保七年壬寅十月七日死時二十七歳次男安次郎他家ヲ継三男源左衛門無作

祐定 横山忠之進ト云大和太孫養子トナル弟横山辰右門無作

祐定 之進享保七年壬寅十月七日死時二十七歳次男安次郎他家ヲ継三男源左衛門無作

横山太平 無作

横山孫太夫 長刀アリ無銘 上野同位也常念ト改ム

祐忠 七太夫 後岡山住喜入ト改

祐信 七之進ト稱ス七兵衛五男 上野養子トナル七兵衛ト

〔祐定〕 横山忠之進定八河内守源祐定が次男也延享二年乙丑二月二十七日死歳六十七也

改父上野老後ハ父が受領ヲ銘ス正徳六年丙申六月朔日大和探藤原祐定ト受領ス

〔祐定〕 横山後七兵衛宝曆二年二月太守繼政朝臣ノ命ニ仍テ寿光ト改銘又明和八年辛卯四月廿一日死時二十五歳

〔壽守〕 横山定治実ハ忠之進次男也後七兵衛養子トス後七兵衛ト改ム

〔壽吉〕 備前國長船住横山宅之進壽吉ト銘又明和六年己丑六月十三日死又時三十三歳

〔祐定〕 源八郎横山下銘又寛保三年癸亥七月廿七日死時三十二歳

〔祐定〕 横山安次郎父死スル時僅十一歳仍テ後七兵衛門人ト為テ業ヲ務ム

備後國三原正近流

〔壽次〕 横山源八郎今時ノ治工也

○〔正家〕 播州姫路

〔正家〕 黒田助六

〔正家〕 黒田助六

〔信利〕 大和守弟黒田清左工門

〔信利〕 清左工門子黒田城守

〔正家〕 黒田仁

〔正家〕 黒田源右

〔正家〕 二代目黒田源左工門

〔正實〕 黒田源右

〔正實〕 黒田源右

〔實宗〕 黒田太郎

〔兼重〕 黒田源三郎

〔實宗〕 黒田久兵衛

〔正實〕 黒田源右

〔正實〕 黒田源藏

〔鷹謀〕

黒田左兵衛今ノ鍛冶也摂州大坂鎗屋町ニ住地鉄細ニ荒鈍小鈍有白深シ上工ナリ

〔實宗〕 黒田久兵衛

〔實宗〕 黒田久兵衛

新刀辨疑卷之一終

魚妙按 一書二八 藤三郎 次郎三 即源三 即九郎 左衛門 下見ハ 夕レ氏系 圖ノ外 也未ダ 詳ナラズ

